ひっくりかえる（減少。五一・二％から二九・二％へ）。（15）おこった時には泣きわめく（減少。九〇％から七一・七％へ）。（16）おこった時にはまわりの人に乱ぼうをする（減少。六〇・五％から五一・四％へ）。（17）おこった時にはじっとこらえている（増大。四一・五％から五二・九％へ）などが、残った。

第八の問題群は、情緒的興奮の持続性を、おこることについてみようとしたものである（調査問題41―42）。しかし、この問題では、発達的傾向をとらえ得なかった。

第九の問題群は、ひとにぶたれたときの反応をみようとしたものである（調査問題43―45）。この問題でも、傾向をとらえ得なかった。

第十の問題群は、自分の悪口をいわれた際の反応から、発達をとらえようとしたものである（調査問題46―48）。その中、（18）自分の悪をいわれるとおこる（増大。七八・四％から八九・三％へ）。（19）自分の悪口をいわれるとじっとこらえている（増大。三七・五％から五一・〇％へ）などが、発達的傾向を示した。

第十一の問題群は、これまでに述べたものとはやや趣きを異にするもので、その情緒的発達が世の中を明るくすることと関係のあるもの（調査問題49―57）。その中、発達的傾向をとらえることのできた問題は、次のようである。（20）ほかの子の喜ぶことを自分からする（増大。六二・五％から七八・五％）。（21）大人の喜ぶことを自分からする（増大。六七・〇％から八〇・〇％）。（22）草や木をいたわる（増大。五五・八％から七九・〇％へ）。（23）動物をかわいがる（増大。八〇・〇％から八八・六％へ）。（24）自分より小さい子をかわいがる（増大。八四・一％から九〇・九％へ）。（25）おもちゃを大事にする（増大。六三・六％から八〇・〇％へ）。（26）自分の好きな人がほかの子の世話をしたりかまうのをいやがる（減少。七二・〇％から五七・二％へ）。

右に述べたように、用意した十一問題群・五七問は、八問題群・二六問となったわけである。

六、社会的発達

――社会性の発達について――

児玉　省

社会性とは何であるか？　ということは、はっきり規定せられてはいないようである。乳幼児が、はじめて人の顔をほかのものから区別できるようにより、また自分を世話してくれる人達をそのほかの人達から区別できるようになり、これらの人達にほほえんだり喃語したりするようになり、やがて自分と同年輩位のほかの子供たちに注意を払い、声を出したり、喃語したりするようなのは、シャーロッテ・ビューラーが、「人を人以外のものとちがったものとして、反応している」ものにがい当しているようで、比較的わかり易い。けれ共三・四歳から上の子供の場合の社会性として心理学の本がとり上げているものは、所謂る社交性、秩序に服従、協力、親切、競争意識、所有意識などのほか、広汎な項目を包含している。でこ

の研究では、社会性を一定の概念としてとりあげないで、ほかの研究者たちのとり上げている項目を拾い集めてみることから、スタートした。

最初各方面から集めた項目が百数十に達したが、それを主として子供どうしの関係のもの四十二、大人との関係のもの二十七、計六十九に整理した。これらの項目について全国的な調査を行った結果、その低年齢から高年齢へと規則的に増加し、または減少する傾向を示すものは、子供がそれらの点について発達を示すと考えていいわけである。こうして整理して残ったものが、別表に掲げた三十七項目である。この項目は更に大人との関係のもの十二、子供どうしのもの二十三、どちらにも関係のあるもの二項目に分れる。

三十七項目ののうち九項目は、成長するにつれて、漸次減少を示す行動である。よその子供にさわったりまたは押したりする。ほかの子供の遊んでいるのをじっと見ている。ごっこ遊びをする。ほかの子供の言葉をまねていう。自分のものをほかの子供がとろうとすると、あらあらしく引っぱる。大人の動作のまねをする。ごはんを食べさせてもらう。自分のことを自分の名前でいう。の九項目である。これらの項目のあるものは、逆に真正面から表現してもいいかも知れない。たとえば、自分でごはんを食べる、の如きである。しかし、その多くは、本研究のような表現角度をとった方が、よく子供の行動を把握し得られると思われる理由からこういう表現形式をとった。例えば、大人の動作のまねをする、の如きである。

別表は結果の数字からみて、早く子供にでき上ってゆくと思われる順序に列べてある。番号の若いものほど早くでき上ってゆく行動である。この順番を見て考えられることは、対大人関係の項目と、子供どうしの項目という点で、その成立に時間的差はないようである。一番早い方の番号にも、大人関係のものもあり、子供関係のものもある。後の方の番号についても同様である。ただ、大人関係の項目の中で、大人に積極的に接近したり、賛成や手伝いを求めたりなどのような、子供の側から積極的行動に出るものは、比較的早く成立し、(ただし、大人の云うことを素直にきくは、別)、大人からまかされたことを責任をもって実行したり、自分のしたことに責任をもつなどというような項目は、成立がおくれる。これは後者の項目は、その性質がヨリ複雑で、ヨリ困難な事情に鑑みて当然のことと考えられる。『自分のことを自分の名前でいう』というような、自己を客観的な立場から見るような項目の、出現も、おくれるようである。同じような理由で、「わがままである」――実際には、わがままでなくなる点を見ているわけであるが――も成立がおそい。「ご飯を食べさせてもらう」(これは逆に食べさせてもらわなくなる点を見る)、「ほかの子供の言葉をまねていう」「大人の動作のまねをする」などは、いずれも子供の自主独立性の確立に関係する項目であるが、いずれも出現成立がおくれるようである。「ほかの子供の賛成や、援助を求め」たり、「悲しんでいる子供をなぐさめる」などは、もっと早く成立しているのに、前述の自立独立的な項目がおくれるのは、一寸異様な感じであるが、それが実状である。

「よその子供にさわったりまたは押したりする」試揚気球的行動、及び「ほかの子供の遊んでいるのをじっと見ている」が、何れもおそく成立するようであるが、これは一応自分と他人との間に短離を

置いている態度で、客観的態度のでき上りつつある表われとみるべきであろう。しかし、それから更に進んで、自分から他の人達の活動に加わるまでには到っていないものである。一つ変った項目、「友達仲間からのけものにされたりする」が、年と共に増していることである。これは勿論、社会性の発達の正常な面とは考えられないが、自立独立性が発達してきたが、それがまだ他人とのよき協調にまで発達しないでいる状態の、表現ではないかと思う。

紙数の関係上くわしく述べる余裕がないが、最後に、このように残った項目を一べつすると、社会性とは、㈠他人への考慮、他人の立場への考慮、㈡他人への積極的考慮（親切、同情、協調、援助など）㈢自立独立性、自我の確立。このなかには、親その他成人への依存からの解放。大人及びほかの子供の模倣からの解放。自分の意見の主張、などを含む。㈣創始性、指導性の獲得。責任的態度の獲得、などを包含して、その綜合的基礎の上に、その全部を暗示しながら、その一つ一つの部分をも意味して使用せられているんではないかと思う。なおくれぐれも注意したいことは、これらの一つ一つの項目は社会性の一面ではあるが、その全部をみなければ、社会性の全体を把握することはできないということである。

まだこれらの社会性のいろんな面の発達は、大人への積極的接近、大人の模倣、大人への素直さ（大人への手伝いを受け入れるをも含む）、大人への依存からの解放、大人の模倣からの解放、いいつけられたことに対する責任、自分のしたことに対する責任、などの形で展開するようである。他方、子供どうしの間の関係は、他の子供に対する傍観的関心、試揚気球的態度、他人の活動へ参加、協同、自分から他を誘って事を始める（創意性）、他人のことに積極的関心（親切、助力、同情など）、自己抑制、秩序を守る（順番を待つなど）、指導性、などの内容を見合し、その発達は、必ずしも、今ここで述べているようなものでなくて、かなり複雑な展開をとるもののようである。

社会的発達

1 大人のいうことを素直にきく。
2 よその子供に対し自分のものを一しょに使わせる。
3 ごっこ遊びをする。
4 自分のしたことを大人にみてもらいたがる。
5 ほかの子供に玩具をもってきてやる。
6 大人の手伝いを素直にうける。
7 大体大人に手伝ってもらわないで着物をぬいだりしようとする。
8 自分のしたいことを大人に話してきかせる。
9 自分の番を待っている。
10 大人の賛成を求める。
11 競争心がある。（よその子供との間に）
12 ほかの子供の助力を求める。
13 ほかの子供の賛成を求める。
14 悲しんでいる子供を慰める。
15 「わたし」とか「ぼく」とか「自分」とかいう言葉で自分をよぶ。
16 ほかの子供を援助したり守ってやったりする。
17 よその子供達を誘って新しい遊戯をはじめる。
18 よその大人に進んで話しかける。

19 ほかの子供の誤りや、まちがいを指摘する。
20 母親のように他の子供をかわいがる。
21 ほかの子供に過ちをしたらおわびをいう。
22 男の子とだけ遊ぶ。(男の場合)女の子だけと遊ぶ(女の場合)
23 自分のしたことに責任を負う(自分のあやまちをごまかそうとしないでわびたりそのつぐないをしようとする)。
24 ほかの子供のことをほめて話す。
25 人の上にたとうとする。人をひっぱって行こうとする。
26 大人がいてもいなくても決ったことはちゃんとする。(学校、幼稚園、家庭で)
27 まかされたことを責任をもってする。
28 友達仲間から馬鹿にされたりのけものにされたりする。
29 自分のことを自分の名前でいう。(例えば太郎ちゃんは!)
30 大人にいいつけずにほかの子供の誤りを訂正してやる。
31 ほかの子供の遊んでいるのをじっと見ている。
32 よその子供にさわったり又は押したりする。
33 自分のものをほかの子供がとろうとすると荒々しくひっぱる。
34 ほかの子供の言葉をまねていう。
35 大人の動作のまねをする。(例えば新聞を読んだり掃除をしたり等のまね)
36 わがままである。
37 御飯を食べさせてもらう。

七、テスト化の方法

村山貞雄

テスト化の必要

幼児の発達の規準は、以上のようにして調査され、各質問について、三歳、四歳、五歳、六歳の年齢ごとに通過率の統計がおこなわれたが、これをテストの形式になおして、標準値をだしておくと、利用する人々に便利であるので、そのテスト化が計画された。

テストの形式

テスト化は、運動機能、ちえ、情緒、社会性の四つの部門について、おのおのおこなうが、この四つの部門はできるだけ形式の統一をはかるようにした。

この四つの部門を綜合して、綜合発達値をだすことは、このようにしてだされた発達値のもつ意味について、問題があり、また綜合する場合、四つの部門の重さについても議論のあるところであるが、一応この四つの部門をおなじ重さにし、その合計得点をもって、綜合発達値を出し、これを幼児の綜合発達の標識にしようとした。

問題の作成

テスト化のために、まず各部門について、調査問題の通過率をながめた。その結果運動機能と知的問題は、問題による難易があきら